

ミルと勞働問題

河上肇

ミルの經濟學論は早くより天野博士等によりて我國に傳へられ、今に猶官私の諸大學に於て廣く教科書として採用せらる。而かも彼が一個の社會主義者なることは、多く人の知らざる所である。余は先月發行の本誌に、彼の自叙傳及び書簡を引用して、彼自ら一個の社會主義者なりと言明し居ることを紹介し置きたりしが、今其因に、勞働者の將來に關する彼が所論の一端を茲に譯出す。文は彼自ら經濟學論中の最も重要な章と言へる、第四篇第七章の一節に屬する。

前章に於ける研究は、人間社會に關する謬れる理想の無かれかしと祈ることを、其主たる目

雜錄 ミルと勞働問題

的と爲す。之を現時の實際問題に當嵌めるならば、生産の單なる増加をのみ過度に重要視することを柔らげ、分配状態の改善に注意を拂ひ、生産の増加と共に勞働の報酬の大なることを、二個の要件たらしめんとするに在る。生産總額が絶對的に増加するか否かと云ふ事は、既に其生産額が或分量に達したる後は、立法者又は志士スラビスト仁人が何等強き利害を感ずべき問題では無い。乍併、そが其分配に與る人々の員數に對して相對的に増加すと云ふ事は、最上に重要なことである。……

【抄譯者曰】生産政策か分配政策かの問題に對し、正統經濟學者が如何なる思想を有せしかば、余が嘗て拙稿『生産政策か分配政策か』(拙著『社會問題管見』に收む)に於て、其大略を紹介せし事がある。今前記の一文を見る時は、ミルが明かに舊派經濟學の域外に出て居ることが分る。

余が此場所又は他の場所に於て、「勞働階級」又は「階級」としての勞働者と云ふ時、余は此等の語をば慣用に從つて用ひ、且社會關係の現在の状態を記述するものとして之を用ふと雖も、而かも余は決して、之を以て社會關係に關する

第八卷 (第五號 一二五) 七一

* J. S. Mill, Principles of Political Economy. Bk. IV. Ch. 7. pp. 752-761. (Ashley's ed.)

必然的の又は永久的の狀態と爲すに非ず。余の見る所に依れば、一の社會に於て、労働せざる所の或『階級』があると云ふ狀態——労働に耐へざる者、又は以前働きたる爲め正當の休息を得つゝある者を除き、猶それ以外に、人間生活に必要な労働の分前を負擔することより逃れつつあるが如き何等かの人が居ると云ふ狀態——は、決して公平なる又は健全なる社會狀態と謂ふを得ざるものである。乍併、非労働階級といふ大なる社會的害惡の存在する限り、労働者も亦一個の階級を成せる譯にて、假ひ一時的とは云へ、姑く一階級を成せるものと稱し得らるゝ。

【抄譯者曰】労働する者と労働せざる者の階級別を無くすると云ふこと、之が社會主義の主張である。ミルが如何に社會主義の社會を將來に向つて望見しつゝありしかば、以上の文句で明かである。因に曰ふ、茲に労働といふは肉體的労働に限る譯では無い。従て社會の爲に何等かの働を爲しつゝある者は凡て労働者にして、非労働者とは何の働をも爲さざる者の事である。古人も一日働かざれば一日食はずと云つたが、さう云ふ社會を實現したいと云ふのが社會主義の理想である。猶階級を無くするといふ言葉は動もすれば甚しく誤解

されなければならない、社會主義の謂ふ所の階級の廢止とは、只上述の如き意味の階級別の廢止であつて、賢愚長幼一切の差別を無視しやうと言ふのでは無い。

労働者の狀態に就ては、其道徳的及び社會的の方面に關して、之を題目とする所の思索及び議論が、以前に比し近來は餘程墮しくなつた。而して彼等の現狀が決して理想的の狀態にあらずと云ふ意見は、今日甚だ一般的に爲つた。今此問題に關し——問題の根本に關してよりも寧ろ枝葉の點に關し——公にされたる提案、及び之に關して行はれたる議論を見るに、肉體的労働者の爲に希望すべき社會的地位に關して、明かに二個の相對立せる思想が存在して居るやうである。一は之を名けて依頼及び保護説と謂ひ得べく、他は自助説と謂ひ得らるゝ。

【抄譯者曰】ミルが依頼及び保護説と謂へるものが、今日の日本に於て温情主義又は他方主義と謂へるものに略ぼ相當する事は、以下の譯文によりて知るに足るべし。

前説に従へば、貧民の運命は、彼等全體に影響する總ての事に於て、彼等の爲に調節さるべきものにて、彼等に依りて調節さるべきもの

* the theory of dependence and protection, the theory of self-dependence.

では無い。彼等は、彼等自身の爲に考へると云ふ事を、要求さるべきもので無く、又獎勵さるべきもので無い。又彼等自身の考又は期待をして、彼等の運命の決定に、勢力を及ぼさしむる事にしてはならない。恰も軍隊の司令官や士官が其軍隊を組織せる兵卒に對するが如く、貧民の爲に考へ、且彼等の運命に就き責任を有つと云ふ事は、上流階級の義務たるべきものである。……富者と貧者との關係は、此説に従へば、全然權利義務の關係にすべきもので無く、溫情的、道德的、且感情的でなくてはならぬ。即ち富者は臨むに愛撫的保護を以てし、貧民は尊敬と感謝の念を以て之に服従すると云ふ關係にしなければならぬ。富者は貧民に對し親の代理として、彼等をば小供の如くに、指導し制御して行くべきである。貧民等が自分から自發的行動に出づる必要は些しも無い。彼等に向つて要求さるゝ所は、道德を守り宗教を信じて、彼等日々の仕事をすると云ふだけの事で、それ以外には何も無く。……

……以上の理想は、他の理想と同じやうに、歴史的には曾て實現されたる事なきものである。……我國又は他の如何なる國に於ても、上流階級の者が、上記の説に彼等の責任と爲せる所のものと幾分にも似寄りたる働きを爲せし時代は、全く之を指摘することが出来ぬ。それは稀に見る或個人の行爲及び性格を基礎と爲せる所の、一個の理想化である。總ての特權的權力階級は、事實に於ては、彼等自身の利己の爲に其權力を使用しつゝある。彼等の便益の爲に働かざるを得ざる境遇に在るが爲に墮落せる——彼等の眼から見ても——人々に對して、彼等は決して親切なる注意を拂ふことなく、徒に之を輕蔑して、彼等の自尊心を恣まにしつゝあるのみである。余は、從來常に然りしが故に、將來も亦常に然らざるべからず、と主張するので無い。又人間の改良は、權力に依つて生ずる強烈なる利己の感情を匡正するに何等の力なし、と主張するのも無い。併し假ひ弊害は輕減されるにしても、權力そのものが取去らるゝ

に非ざれば、決して根絶され能はぬものである。少くとも余にとつて疑ふべからざる事は、上流階級が、上記の説に想像され居るが如き保護者的の方法に於て支配するほどに、十分に改善され得るよりも遙か以前に於て、此の如く支配せらるゝには、下層階級が餘りに多く進歩するに至るべし、と云ふ事である。……

【抄譯者曰】人間を一般に利己的のものと見るは、アダム・スミス以來正統學派に共通の思想なるが、上記の一文を見れば、ミルも亦之を繼承する者と謂ふべし。彼は人間を餘りに善きもの又は善くなり得るものと見ず。殊に下層階級の改善に就ては、彼は、特權階級の利他心に對して、さしたる信用を置かざる者である。此點に於てはマルクスも亦同様なり。

労働者、少くとも歐羅巴の進歩したる國々の労働者にとつて確なる事は、彼等は今後再び家長的又は父權的の政治組織に服従すること無かるべしと云ふ事である。此問題に既に決せられたものである、それは彼等が讀むことを教へられ且新聞紙及び政治上の論說に接することを許されたる時、——それは新思想の傳道者が困難を嘗めつ、彼等の間に入り込み、彼等の智力及び感

情に訴へて、彼等が彼等の上に立てる人々より公然又は暗々裏に教へ込まれし信條に反對するに至りし時、——彼等が同じ棟の工場に於て社會的に協力してと云ふ意味労働する爲に、大勢寄せ集められし時、——鐵道が彼等をして自由ニ其住所を變更するを得せしめ、彼等をして恰も着物を着替ふると同様に容易く彼等の親分又は雇主を變更するを得せしむるに至りし時、——選舉權を得ることに依り、彼等が政治に参加すべく獎勵さるゝに至りし時、——其時を以て件の問題は既に解決されたのである。労働者階級は既に彼等の利害をば彼等の掌中に握つた。さうして彼等は、彼等の雇主の利害と彼等自身の利害とは決して同一に非ずして、寧ろ相反對するものなりと考ふるに至りし事を、絶へず示しつゝある。上流階級の或者は、道德的及び宗教的の教育に依りて此等の傾向を防ぎ得るものと自惚れて居る。乍併、彼等の目的に役立つが如き教育を施す時代は、彼等の爲に既に過ぎ去つて居るのである。……

今後に於ける勞働者の幸福及び德行は上に述べたるが如きものより遙に異れる基礎の上に置かれねばならぬ。貧民は既に後見を要せぬ時代と爲つた。最早彼等をば小供の如く支配し又は取扱ふことは出来なくなつた。彼等の運命を開拓する事は、今日では彼等自身の力に任しなければならぬ。一國民の幸福は個々の市民の正義及び自治に依りて存立せざるべからざること、是れ近世國民の正に學ぶべき教訓である。……獨立の徳性、是れ今日の勞働者にとつて最も必要なものである。助言にしろ、忠告にしろ、將た指導にしろ、之を勞働階級に與へんとするに當つては、今日以後、吾人は彼等とを遇するに平等の人格者を以てし、彼等は又彼等の眼を開いて自分で之を取捨することにしなればならぬ。將來の望は、彼等が理性的になる程度如何に懸つて居る。……講演及び討論の設備、共通の利害問題に關する共同の研究、職工組合、政治運動、此等のものは、公共的精神を醒し、民衆の間に種々なる思想を普及し、

比較的智力ある人々の間に思索と反省を促す點に於て、總て役立つものである。教育なき階級が餘りに早く選舉權を得ることは、彼等の進歩を早むるよりも寧ろ妨ぐるものであるが、併し之を得る爲の運動に依つて、彼等の進歩が大に刺戟せらるゝ事は、毫も疑ない。猶一方に於て勞働者階級は今や輿論の一部を成しつゝある。今や彼等又は彼等の一部は、一般的利益に關する總ての議論に向つて参加しつゝある。新聞紙を機關として用うる總ての人々は、場合に依つては、勞働者階級を其聽衆として有ち得る。……彼等は、假ひ他より助けられずとも彼等自身の努力を以て、以上の如き諸種の方法により彼等の智識を増加するに至るべきは疑ひない。同時に又、政府又は個人の盡力に依り、學校教育の品質及び分量の上に大改良が行はれ、人民の大多數が、精神的教養の上に、從て又之に本所の徳性の上に、一層急速の進歩を爲すに至るべき事を期待し得るの理由もある。……此の如き智識の増進が齎す所の結果に就ては

確に種々の事が豫期せられる。第一に、彼等は上流階級の單なる權威及び威信によりて、指導され支配され、彼等の行くべき道を指圖せらるる事を、今日よりも猶益々嫌ふに至るであらう。今日の彼等にして既に、其上層階級に對し精神的服従を爲すべき或謙遜なる畏怖又は宗教心を有たずとせば、今後は益々之を缺ぐに至るであらう。依頼及び保護主義は彼等にとつて益々耐へ難きものと爲り、彼等は、彼等の行動及び條件は本質的に自治に依るべきものなる事を要求するに至るであらう。同時に又、彼等が多くの場合に於て、彼等の事件に立法上の干渉を要求し、彼等に關係ある種々の事物に就て法律上の規定を要求するに至ることも、極めて可能である。……而かも此等の立法たる、彼等自身の意志、彼等自身の思想及び主張に本き制定さるべきものにて、他人より彼等に向ひ上より授かるべきものに非ざることを要求するに至るであらう。……

……余は、彼等(勞働者等)が勞賃の爲に勞

働するといふ状態をば、彼等の窮極の状態として、永久之に満足し居るべし、と考ふること能はざる者である。……人口稠密なる舊國に於ては、賃働勞働者として其生活を始めし人々は、一般原則として、最後まで其状態を續け、然らずんば更に下層に沈んで公共の慈善に衣食する事と爲りつゝある。乍併、人類進歩の現時の状態に於ては、平等の思想が日を追うて益々貧民階級の間に傳播されつゝあるが故に、而して此趨勢は、印刷物の公刊乃至言論の自由をば、全部禁壓するに非ずば、最早や之を防壓するを得ざるものなるが故に、人類が雇主及び被働人と云ふ二個の遺傳的階級に分割され居る事が永久に維持さるべしと云ふことは、吾等の豫期するを得ざる所である。此關係は、勞賃の拂主にとつても又受領者にとつても、略ぼ同様に不満足なものである。若し富者が貧民を目して、一種の自然法に依り、彼等の奴僕たり従者たるものと爲すならば、富者は其の代り、貧民にとつて單に餌食たり牧場たるに過ぎざるものと看做

さるゝであらう。貧民の要求する題目並に期待は飽くことを知らざるものにて、そは彼等に讓步する毎に其範圍を増大する。…………今日大部の勞働者の唯一の努力は、出來得る限り多くの勞賃を得て、出來得る限り勤勞の形に於て少きものを返さんとするに在る。思ふに早晚資本家階級にとりても、其利害及び感情が彼等に對し敵對的關係に在る人々と、密接に且屢々接觸して生活すと云ふ事は、恐らく耐ゆべからざるに至るであらう。…………

【抄譯者曰】以上譯出する所に依つて見れば、原論著作時代に於けるミルは、彼自ら其自叙傳中に言へる如く、明かに「社會主義者といふ一般的名稱の下に包含せらるゝもの」と爲つて居る。是れ注意すべきことの第一である。次に彼は、勞働問題の解決に就き温情主義に反對し、上流階級の公共心に餘り多くの信用を置くことなく、自力主義を主張し、主として勞働者自身の力に依り其運命を開拓すべき事を唱道して居る。此點に於て彼の立場は、空想的社會主義と科學的社會主義（マルクス主義）との中間に在る。マルクスに従へば、社會組織の改造は、主として勞働者階級の負擔すべき使命であつて、其方法は所謂政治的階級争闘に依り、政權を勞働者階級の手に收め、然る後其政權をば社會全體の利益の爲に用ひ、

雜錄 再び王制作者に就て

以て階級なき社會——即ち働く者と働かざる者との階級的區別なき社會——を建設すべしと言ふのである。然るにミルの考は、他方主義を排し自力主義を唱ふる迄にはなつて居るが、しかし其自力主義たる、政治的階級争闘の形式を採るべしと云ふ迄の主張には爲つて居ないのである。猶ミルの思想は、其他多くの點に於て、斯かる中間的地位を占むるものにて、思想史の研究者にとつては、頗る興味あることである。